

基本理念「心のかよう医療を行い、信頼される病院」

かわせみ

前病院長
林道廣

新病院長
河合英

特集！新病院長の素顔に迫る

注目 新任幹部のご紹介

掲載内容

- ・新旧病院長 対談会
- ・副院長就任のご挨拶
- ・副院長退任のご挨拶
- ・くらわんかフォーラム報告

市立ひらかた病院の地域医療における未来

林道廣 新病院事業管理者(前病院長) × 河合英 新病院長(前副院長兼 医療相談・連携室長)

新旧病院長対談

司会進行 宮垣純一 前病院事業管理者



まさる
新病院長 河合 英

河合) 林先生は2018年に副院長として市立ひらかた病院に着任され、翌年2019年に病院長に就任されました。私はその年に当院の消化器外科主任部長として呼んでいただき、それから6年間一緒に過ごさせていただきました。私から見た林先生は、例えば「何手も先を読む将棋の名手」のような方ですね。

地域医療における公立病院の使命

宮垣) なるほど、上手い例えですね。おふたりの共通点は消化器外科が専門ということですね。林先生は肝胆膵、河合先生はもともと肝胆膵を専門とされ、後に上部消化管を中心に治療に当たられています。河合先生は当院のロボット手術の導入にも「尽力いただきました。林先生は7年間病院長を務められましたが、特に印象に残っていることは何でしょうか？

林) 私が病院長になった時はコロナのさなかでした。宮垣さんとは二人三脚でコロナ対応の苦労を共にしましたね。職員全員の力を結集し一丸となって乗り切ったことは、確かな自信になりましたし忘れられない経験です。

医療の道をひたすら歩んで来た私は、宮垣さんから公立病院の在り方、病院と行政の関係性などを学ばせていただいた。とても感謝しています。

宮垣) こちらこそありがとうございます。林先生、医療圏内唯一の公立の総合病院の病院長として心がけていたことはありますか？

林) コロナのような感染症医療は公立病院が担うべき政策医療の一つで、「地域の砦」としての責任を常に感じていました。特に心がけてい

たことは、コロナと通常診療との両立です。どちらか一方ではいけない。簡単なことではありませんでしたが、公立病院の使命だという信念で職員と共に邁進しました。

前病院長が知る新病院長の素顔

宮垣) ここで、かわせみ読者の皆様に新病院長の人柄などに触れていただきたいと思えます。林先生だからこそ知るエピソードなどがありましたら教えてください。

林) 河合先生が市立ひらかた病院に着任された時、ようやく一緒に仕事ができると嬉しかったですね。とにかく河合先生は若い頃から老若男女にモテる人でした(笑)。仕事から離れるとムードメーカー的存在で、場を明るくするオーラがある。しかし仕事となると一転して非常に真摯で真面目でその切り替えがすごい。「人としての総合力が高い人物」と言えますね。

河合) (汗)

10年先を見据え人を大切に

宮垣) 河合先生、病院長という新たな立場で大切にしたいことや抱負を聞かせてください。

河合) 林先生のお話を聞いて、改めて身が引き締まる思いです。

今、病院運営、病院経営は非常に難しい時代にあって、やるべきことは数多くあります。そんな中で、私が大切にしたいことは「人の存在です。当院を中長期に支えてくれる人材を見出し育成していくことが、これからの当院の確かな基盤をつくると考えています。3月末に私自身を



含め副院長4名が退任したことに伴って、まずは10年先を見据え、中核的な役割を担ってくれる人材を育てなければいけません。

宮垣) そう考えるきっかけになった、当院での経験があったということですか？

河合) その通りです。2024年に「ひら10フェス(新病院開院10周年記念イベント)」の実行委員長として、これまで接点の少なかった様々な職種の若い職員と一緒に仕事をする機会を得ました。20、30歳代の職員は、自由な発想で果敢に新たなことに挑戦したいという意欲があり、想定していなかった化学反応が次々に起こりました。世代や立場、考え方の違いを越えて、若い力を原動力に同じ目標に向かった高揚感は忘れられません。

宮垣) 「ひら10フェス」では地域住民を中心に約1,100人もの来場があり、河合先生のリーダーシップの元で成功に終わり感謝しています。このイベントをきっかけに若手職員の横のつながりが生まれ、嬉しい副産物も生まれましたね。この経験から学んだことや気付きはなんでしょう？

河合) 年齢や職種を問わず有能な人材を登用することの必要性です。もちろんベテランや中堅職員には、積み重ねてきた技術や知識の熟度をさらに高め次世代へ繋いでもらう。そしてスムーズに、加速度的に、世代交代を進める必要があると考えています。

医療の現場は人々の様々な感情が生まれる場所ですが、誤解を恐れず言いますと、「楽しく仕事をすること」が優れた成果につながるということにも改めて気付きました。楽しむということとは自分自身が仕事に誇りを持ち、日々の研鑽がなければ生まれぬ感覚です。病院の雰囲気は一人一人の職員がつくるものです。医療業界全体に閉塞感が漂う今だからこそ、患者さんにも、上を向いて生き生きと働く姿を見てもらいたいと思います。

林) 確かに楽しいという感覚は波及効果が



前病院長 林 道廣

ありますね。患者さんが明るい未来を見るために必要だと思えます。なにより河合先生らしいし、これからの医師人生でも大切にしてほしいと願います。

医療相談・連携室長の経験からの学び

宮垣) これまで河合先生は、医療相談・連携室長としてもご尽力いただきました。病院長として生かすことができる学びや気付きはありましたか？

河合) はい、医療相談・連携室長を3年間務めさせていただきとても多くの学びがありました。今思うと大学病院勤務時代は、近隣の診療所やクリニックの医療について十分に捉えられていなかったと思います。室長として地域の診療所等への訪問や面談、会合への参加といった交流を通して、紹介患者さんが当院での診察に至るまでの経緯をイメージできるようになり、多くの地域医療関係者や当院職員の関りや努力がなければ、医療が成立しないという事実を改めて実感できるようになりました。

地域医療連携への思いとメッセージ

宮垣) これからの地域医療連携について、お二人の考えを教えてください。

林) 地域医療連携は当院にとって非常に重要な課題の一つです。これからは病院事業管理者の立場から、地域全体の医療という広い視野を持ち、緊密な連携のもとに地域住民の命と健康を守るための医療環境づくりに努めたいと思っています。

河合) 当院にとっても地域住民にとっても、地域医療連携は非常に重要だと確信しています。要となるのは一方通行ではない双方の関係性です。最近強く感じていることですが、医療連携の中

心はあくまで患者さんであり、最善の医療を提供するためには、地域の医療機関、当院、そして患者さんの三者の理解と協力が不可欠です。まず取り組むべき方向性として、地域住民に医療全般への関心と理解を持っていただけるよう、分かりやすい情報を発信したいと考えています。また、当院に対する地域医療機関からのご要望の中には、マンパワーの理由でお応えできないこともありました。地域医療の課題に当院単独での対応が難しくても、発想を転換して病棟連携の可能性を探っていきたくと考えています。

の皆様にメッセージをお願いします。

河合) これまでと変わらず公立病院としての役割を果たし、地域の皆様のご期待に応えられるよう、職員一丸となって努めてまいります。引き続きご指導とご協力を賜りますようお願いいたします。

宮垣) 地域医療においては、診療所や病院それぞれが役割や機能を果たすことが重要です。それをつなぐのが地域医療連携だと思っています。当院の果たすべき役割が果たせられるように、関係者の皆様には支えていただきましたと願っています。ありがとうございました。



副院長就任のご挨拶 令和8年 4月1日付

やすよし 副院長 兼 心臓血管外科主任部長・呼吸器外科 兼 医療安全管理室長
吉井 康欣

このたび、2026年4月付で市立ひらかた病院の副院長を拝命いたしました、吉井康欣でございます。昨今の医療を取り巻く環境の変化や少子高齢化の進行、感染症や自然災害への備えなど、地域医療に求められる役割は年々大きくなっております。そのような中、市民の皆さまの健康と暮らしを支える公立病院である当院において、副院長という職責を担うこととなり、責任の重さを改めて感じております。

私はこれまで、心臓血管外科医として大阪医科薬科大学病院、京都桂病院、医仁会武田総合病院など複数の医療機関において診療に携わってまいりました。命に直結する手術や周術期管理に長く関わる中で、医療の質はもとより、「安全であること」「安心して医療を受けていただけること」の重要性を強く実感してまいりました。これまでに培ってきた他施設での臨床経験や多職種によるチーム医療の知見を生かしながら、医療安全の取り組みを一層重視してまいります。医療事故の未然防止や安全管理体制の充実を図り、職員一人ひとりが声を上げやすい風土づくりを進めることで、市民の皆さまに信頼される医療の提供に努めてまいります。

今後は院長を補佐し、地域の医療機関や関係機関との連携を深め、皆さまにとって身近で、安心して頼っていただける病院となるよう尽力してまいります。今後とも、市立ひらかた病院へのご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

退任のご挨拶 (令和8年3月31日付)



木下 隆 副院長 兼 外科主任部長 兼 医療安全管理室長

2001年市立ひらかた病院(市立枚方市民病院)に赴任し、地域の先生方のご協力、ご支援をいただき25年間消化器・一般外科診療を続けることができました。この間、病院スタッフや同僚に支えられ、大きな事故もなく10,000例を超える外科手術(主に内視鏡外科手術)に携わることができました。お力添えをいただいた皆様に本当に感謝しております。

2026年4月からは新しい体制で市立ひらかた病院の診療が始まります。私も定年とはなりましたが体が動くうちは、もう少し病院勤務を続けさせていただこうと思っています。

これからも変わらぬご支援のほどよろしくお願いいたします。



後藤 功 副院長 兼 内科主任部長 兼 薬剤部長

当院での6年の歳月は、振り返れば瞬く間の出来事のようなものでした。2020年4月に当院へ赴任いたしました折、同時にCOVID-19の波が押し寄せ、呼吸器内科医として診療の最前線を担うこととなりました。その際、地域の医療機関の皆様には多大なるご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

着任後は診療の充実を図るため、新たな低侵襲検査であるEBUS-TBNA(超音波呼吸器内視鏡)やFeNO(呼気中一酸化窒素濃度測定)の導入にも取り組んでまいりました。

現在の当院呼吸器内科における確かな診療基盤が築かれたのは、これまで在職してこられた医師の長年にわたる努力の賜物です。加えて、優秀な若手医師が加わったおかげで、安堵の思いを抱きつつ退職の時を迎えることができます。

6年間にわたり地域の医療機関の皆様にご支援とご厚情に、改めてお礼を申し上げます。



白石 由美 副院長 兼 看護局長

私儀、このたび3月末日をもちまして、副院長兼看護局長の職を退任することとなりました。在任期間中は、コロナウイルス・パンデミックを経験する中で、地域医療機関の皆様方からのご尽力を賜り、第二種感染症指定医療機関としての役割を果たすことができました。地域医療機関との緊密なネットワークによって、患者の皆様が安心して住み慣れた地域へお帰りいただける体制を整えることができ、現場を共にした私にとってはかけがえのない財産となっております。

また、2023年には「看護師特定行為研修指定機関」に承認され、7区分11行為の研修に取り組みしました結果、24名の修了生を輩出することができました。看護局一同、今後も看護実践能力の向上と医師のタスクシフティングにさらに取り組んでまいります。

最後に、地域医療機関の皆様方の益々のご健勝と地域医療のさらなる発展を祈念いたしまして、退任のご挨拶とさせていただきます。

くらわんかフォーラム報告



令和8年1月24日(土)、当院講堂にて市立ひらかた病院 病診連携報告会「くらわんかフォーラム」を開催いたしました。本フォーラムは、枚方市病院協会、枚方市医師会、枚方市歯科医師会、枚方市薬剤師会の後援のもと、毎年1月に開催しており、参加者同士の交流を深め、地域医療機関間の連携に貢献することを目的としています。

第1部では当院医師から講演を行い、第2部では枚方市医師会、枚方市歯科医師会、枚方市薬剤師会からそれぞれご講演いただきました。参加数は75名(会場参加57名、オンライン18名)で、多くの方にご参加いただきました。